

朝鮮民族運動史研究会 第96回例会

「初期開化派の日本認識」

1990年9月16日

金 河元

ここでは呉慶錫と李東仁の対日外交活動に現れてくる朝鮮改革構想を主に日本側の資料をもとに見ていくことにした。

訳官として清国を往来しながら、北京で進歩的人物らと広く接する一方、欧米の文物を積極的に朝鮮に紹介したとする初期開化派の先駆たる呉慶錫は、丙寅洋擾、江華島条約の時活発な外交活動を展開する。丙寅洋擾の処理のため秦請使が北京に派遣される時、呉慶錫も一緒に派遣され北京でフランスの情報を広く収集し朝鮮に送るこの時の呉は積極的な開港を主張していない。しかし辛朱洋擾と江華島条約の時は積極的な開港論を展開している。江華島条約交渉時期の呉は、清国の例を見ても朝鮮も開港は避けられない、しかし朝廷では今度も辛朱洋擾の経験をもとに相変らず鎖国を固執している、そうすると結局万民塗炭の状態になるので、黒田全権が江華島に着いたら「直ニ上陸シ威厳ヲ示サル」べきを日本側に依頼している。

呉のバトンを継いだ李東仁は、日本側の外交ルートを通じて渡日、呉の死亡後、呉の跡継として活発な外交情報収集活動を展開する。渡日直前の李の日本認識は次の通りである。

朝日の間は兄弟の間柄である、貧弱たる朝鮮は富国強兵に無関心である、朝鮮改革のモデルは日本である、今の朝鮮政府は日本との交渉窓口にならない、改革において日本の勧告を積極的に受入れるためには現政権を追払ってからである。そのモデルの国日本にわが同志数十名を派遣し日本の諸制度を詳しく調べることはできないだろうか。

六矣塵に借款を提供し、六矣塵はそれをもって汽船を買入れ朝鮮内地と開港場との流通を活発にする。一方日本とともに鉾山や新田等の開発を担当する。そのかわりに六矣塵に集った穀物や金銀を借款の返還として日本に渡す。呉、李ともに文明に対する憧れが非常に強く、その意味では近代文明の旗のもとでのインタナシヨナリズムの一形態であるかも知らない。但六矣塵と小數エリート層たる開化派だけという非常に弱な国内基盤をもつてそのようなインタナシヨナリズムを唱えることの意味はどういうものであるうか。それにもかかわらず、彼等が提起している開港、財政、諸制度や技術導入等の諸問題は、当時の朝鮮が避けて通れる問題ではない。この両者の間のギャップを埋めて行く可能性はなかったのか。それを埋めて行く環境づくりにおいて、これらの開化派の役割が要求される可能性はまだ残されていたと思われる。開化派の進歩性は、開化派それ自体よりは、このような側面で見えて行く必要があると考えられる。

甌山（ジュンサン）教或は甌山思想という言葉が一般的に知られるようになったのは、1980年代後半頃である。韓国社会は1970年代初めから高度経済成長政策による急進的な産業化過程を経てきたが、それと共に政治的葛藤と社会的混乱を経験したのである。社会的混乱は、かつて韓国近代化の基となった西欧的な価値観の衰退と長い間死蔵されてきた伝統思想の台頭、または南北統一問題の登場などによって、依然として大きな課題となっている。このような社会的状況の中で新しく台頭したのが、甌山思想をはじめとする民族伝統文化と宗教である。その中でも、韓国の開国神話の理念と伝統を受け継いでいると主張する甌山教は、金芝河をはじめいわゆる民主思想家たちによって再評価され、一般の人々に新たな認識を与えるようになった。本論文においては、甌山教が形成された時の時代状況进行分析して甌山思想の主な内容を紹介することにしたい。

甌山教は、1902年朝鮮時代の末期、姜一淳（カンイルスン、号は甌山）という創始者によって全羅道地方を中心として形成された。これは甌山教研究の為に二つの重要な意義をもつ。一つは、甌山教発生年度が、韓日併合の直前であり、韓国歴史上、重要な時期に当たることと、もう一つは、創教地域が民族的な民衆運動であった東学革命の発生地域であるという点である。それ故、甌山教は国家の滅亡と東学革命の失敗という二つの重要な出来事に深く関わる一方、宗教的にも、東学思想を改革あるいは補完できる可能性を持つのである。以下においては、甌山教形成の基盤となった社会的背景即ち、当時の社会的構造を分析し、その中で生きた創始者姜甌山の成長過程及び宗教的経験を調べ、終わりに、甌山思想の要点を分析してみることとする。

I. 社会・経済的状況

甌山教発生の社会的背景を考察するためには、創始者姜甌山が出生した1871年から宗教的経験を通じて布教活動を始めた1902年まで、約30年間の朝鮮社会に対する構造的な分析を必要とする。姜甌山が出生した1871年からは辛未洋擾(1871)、雲揚号事件(1875)、西洋諸国による修交要求(1880)等が強くなり、日本と締結した丙子修好条約以外にも米国(1882)、英国(1882)等と修交通商条約を結ぶようになり、後の韓日併合まで32個の条約を結ぶに至った。このように朝鮮が国際舞台に登場するようになるや否や、日本をはじめ、列強諸国の勢力と文物が国内に押し寄せて来るようになった。そして、権力エリートたちは保守勢力と革新勢力と分かれ、権力闘争が日々激しくなり、ついには壬午軍乱(1882)と甲申政変(1884)を発生させた。また、1982年から陽的に現れた東学教徒の教祖伸冤運動が、後に国内政治問題にまで広がり、東学革命(1984)として発展された。東学革命は甲午更張と言われる国内的な改革以外にも、清日戦争という国際戦争が韓半島で行われるきっかけとなった。

まさに、1871年から約30年間の政治的な状況は、国際的な影響と国内的な権力階級の葛藤によって急激な変動をもたらした時期であると言える。特に、このような政治的な不安定によって、政策決定者がころころ替わり、これによって国内政策は一貫性を失い、地方行政に対する監督も緩んでしまったのである。ここで、一般民衆の政治的な疎外現象が益々加速化され、また国家の政治は少数の権力エリートたちの権力闘

争と不正腐敗によって乱れ、国体の存続まで危なくさせたのである。朝鮮末期の政治的な不安定によって、地方官吏による被支配階級の財産略奪が日々増えて、一般民衆の生活はどん底に陥った。また、このように政治の矛盾と不正腐敗の蔓延は、ついには、各地方の一揆を誘って高宗が即位した明年である1864年から、東学革命が発生した1894年1月まで、30年間、全国で41件の一揆が発生した。その中でも特に、全羅道は官弊が激しかった為に、一揆が多く発生したが、東学革命直前である1893年11月には、古阜・全州・益山等の三郡で同時に発生したのである。このような一揆は、殆どが地方官吏の虐政に対する被抑圧階級の生存権確保の為に抵抗であった。

II. 宗教・文化的状況

19世紀末の朝鮮社会において、門戸解放と共に本格的に流入される西欧文化は、国内の伝統文化と深刻な葛藤現象を見せた。また、在来の宗教である儒教と仏教及び道教は、その基盤が弱かった為に、社会的な混乱を克服させる精神的及び価値上の支柱を、一般民衆に提供することができなかった。それ故朝鮮末期には、一般民衆の精神的な基盤になる組織化された宗教体系が、整えられなかったとも言える。更に、朝鮮初期から伝わってきた『鄭鑑録』は、一般民衆の間に盛んになったが、これにより、新しい世界を建設するメシアに対する望みが、もっと強くなった。また、このようなことが東学革命の勃興と推進力に利用された。以上のように、朝鮮末期の宗教的文化的状況は、社会構造の他の分野と同様に、混乱が極めて甚だしかった。一般民衆は、生のカオスの中で人間としての方向を提示し不安を払って生きられるようにしてくれる表象体系あるいは確信体系を持ていなかったのである。

III. 甌山教の思想

韓国民族伝統の中で、天宰は桓因として認識されてきたが、甌山は自身が上宰だというのである。彼は天地公事という概念を通して、解冤相生を実践することによって彼の理想世界の母型である後天仙境を開くというのである。即ち、後天5万年に開かれる待望の神仙境界とは、檀君以前へ原始返本して天上の姿をそのまま地上に移し置いた天・地・人の三界を称し、その三界の大権を甌山自身が握るということである。東学が先後天の転換の機運を「天皇氏の大運」と言ったが、甌山はこれを「無極大運」と言って、その後天開闢の大役事を起こさせることができる無極大運の基本原理を「神道」と言う。神道による無為而化の仙能だけが仙政理念となり得る。造化仙政の理念的な核は、解冤相生であり、これは甌山思想を実践する必要不可欠の事柄である。彼は過去には、悪質者がよく生きたが、後天には、善良者がよく生きて福を受けると警告しながら、「先天の英雄時代には、罪をもって食べて生き、後天の聖人時代には善をもって食べて生きる」と言った。このように甌山思想は、先天と後天の発展的な転換を論理的に設計する特性がある。その思想的な源は、桓因・桓雄・桓儉の三神帝王・三神帝釈・三神王のような三位とか、三位一体の伝統思想に接脈させることによって、民族・民衆の宗教思想まで、その幅を広げている。また、甌山は伝統信仰と共に、巫俗信仰も重要な思想確立の媒体とするのである。そして甌山の儒・仏・仙の三教との融和問題は、東学の崔水雲と同じであるが基督教に対しては、水雲よりはるかに好意である。彼は宗教集大成の作業が、神明界で行われているが、神明の統一が終わらないと、真の人類救済は不可能であると主張する。彼は各宗教の法術が異なるのを認めながら、万教の一元的な融和の統一思想を打ち出すのである。

新図書案内

朝日関係史料集	李 光洙	ソウル	景仁文化社	1986年
清季中日韓関係史料 第11巻	中央研究院近代	〃	〃	〃
高麗時報	現代社	〃		
ハングイルボ 縮刷版 [1954-1955]		〃	ハングイルボシャ	
特殊調査文書 [日本外務省] {日帝の韓国侵略史料集} 1,2,3,5,29,30.	高麗書林			
日本ノ韓国侵略史料叢書 [1984-1906] 1-32	ソウル	韓国出版文化院		
新東亜 1-16	〃	景仁文化社	1986年	
安 重根と日韓関係史	市川 正明	東京	原書房	1979年
中国史人名辞典	外山 軍治, 日比野丈夫	東京	新人物往来社	1989年
織田佛教大辞典 [新訂重版]		東京	大蔵出版社	1984年
學燈 1, 2		ソウル	現代社	1982年
朝鮮貨幣考	柳 子厚	釜山	民族文化	1987年
朝鮮史	朝鮮史学会	ソウル	景仁文化社	1982年
朝鮮併合史		ソウル	太山文化社	1982年
朝鮮土地改良事業要覧 [上、下]	朝鮮總督府			1934年
朝鮮産業史 [上、中、下]	山口 精	東京	賓文社	1910年
批判 [第1-11巻]	昭和6年~昭和13年]	ソウル	現代社	1982年
朝鮮之光 [1~8]	大正11年~昭和2年	〃	〃	1982年

研究会御案内

- * 在日朝鮮運動史研究会 第127回例会
日 時 1990年 11月11日 [日] 午後2時
テーマ 兵庫県下のため池と朝鮮人-昭和池調査の報告他
報告者 金 英達氏
- * 朝鮮民族運動史研究会 第97回例会
日 時 1990年 11月18日 [日] 午後2時
テーマ 韓国における民族解放運動史研究の近況
報告者 水野 直樹氏
- * 日韓、在日キリスト教関係史研究会

今回は休会です。

* 場所はいずれも青丘文庫にて